

時には茶碗やお皿や調味料の用意など、テーブルの準備をやつてのける小さなメイドさんのようです。

お母さんは一つ一つのことを特に教え込んできたわけではないのですが、気がついた時にはずい分役に立つ子になっていたということです。その彼女が年長さんになってから時々おねしょをするようになり、最近では昼間も失敗することがあつて心配になり、相談室を訪れました。

○多忙を極めるお母さん

桃子さんのお母さんは多才な人で忙しく活躍し、1日が48時間あつたらよいのにといつも言っています。桃子さんが生まれた年だけ出品を断念した展覧会では、毎年良い成績で入選し、お母さんの生きがいの一つです。また手先が器用で自分の洋服を高校時代から作り始め、今では桃子さんのものも含めて洋服は全部手作りでず。

お父さんは技術者でよく外国へ出かけ、長い時は1年位帰って来ません。そんなこともあつてお母さんは二年

前から趣味と実益を兼ねて小さな手芸店を始め、ますます忙しくなりました。

○小さい時から自立心を

忙しいお母さんは、こどもは一人と決めており、小さい時から自分のことは自分でするということを大事に桃子さんを育ててきました。というのも自分は四人きょうだいの末っ子で上の二人が病弱だったために、母親が上の二人にかかりきりで、その分下の二人は自由に育てられました。そのためか下の二人は上二人への手のかけ方に批判的で、ああいう親にはならないという信念をこども心に抱いて成長したということです。ですからこのお母さんの桃子さんへの授乳も、トッターの中で哺乳びんをタオルで支えてのものでした。またこどもといえども親とは独立の人格をもった個人であるとのことから、彼女が言葉を使い始めた時、マンマ、ブーブー、ワンワンといった幼児語を周囲の大人まで同調することはないと考えました。むしろ言葉を覚える大事な時期なので、正

しい日本語を使ってモデルを示すべきであるとのことでした。が、一方では自分が彼女に用を頼む時は、どんなに彼女が幼い時でも、「お願い」と「ありがとう」を必ず言ったといえます。また彼女が遊びに夢中になってトイレが間にあわなかった時など叱らないようにしました。このことに関しては自分が小さい時、母親がこどもは失敗をくり返しながら大きくなっていくものだといつて叱らない人だったことを見習ったということです。違うことというと、叱りはしないけれどもパンツのはきかえは自分でというのがこのお母さんのしつけでした。

○やっぱり一度は甘えてみたい

桃子さんはこうしてお母さんのやり方に早くから慣れ、それが当り前としてやってきました。ところが去年の暮、お母さんにガンが発見され、急いで手術をするこゝろになったのです。それで新年早々から約二か月半、彼女はお母さんの実家に預けられました。おじいさんおばあさんはお母さんの病気も心配ですが、幼い桃子さんが

不憫で、今から思うと度を越して彼女を甘やかしてしまつたようでした。洋服の着脱から入浴、食事のすべてにまるで赤ちゃんを預つたかのようでした。お母さんにあまり抱かれたことのない彼女は湯舟の中でまで抱いてくれるおばあちゃんにすっかり甘え、お見舞いに現われた彼女を見て、お母さんはあわてておばあちゃんに「あまり甘やかさないで」と頼んだほどでした。

大手術の後なのでお母さんが退院してもしばらくの間はおばあちゃんの家に行きましたが、そろそろ幼稚園が始まる準備があるからと、三月下旬桃子さんは久しぶりに我が家に戻りました。が自分が生まれ育つた家が彼女にはまるで別世界に映つたのでしょう。間もなくおねしょが始つたのです。

事例二 こどもさえいなければ

——交通事故で逝つたお父さんを恨むお母さん——

花子さんは小学校5年生ですが、去年の10月からずっ

と学校へ行っていないません。学校へ行かないだけでなく、家から一步も外に出ずベランダの洗濯物すら取り込もうとしません。そして気に入らないことがあると弟をいじめたり、手当り次第に物を投げとばすので家の中は襖が破れていたたり、食器戸棚のガラスが割れていたりでたいへんです。

○こどもと背中で話をしてきたお母さん

花子さんのお父さんは彼女が四歳半の時交通事故で亡くなり、今はお母さんと弟との三人家族です。お母さんはずっと公務員として共働きでやってきましたが、彼女たちが小さい時は保育園から二人を引き取って、夜寝かせつけるまでの何時間かはまるで戦場のような忙しきでした。お父さんがいる時は二人の面倒を見てもらうことが出来たのですが、テレビを子守りにお母さんは食事の仕度と洗濯と部屋の片付けに大奮闘でした。ですから、こどもたちが何か話しかけてきても、生返事をしていたり、保育園であったことを自分からゆっくり聞いてあげ

た記憶がほとんどないということです。いつも背中で聞いているか呼ばれても「あとで」と言っただけのままになってしまふことが多かったようでした。

○肩身の狭い思いをさせたくない

——無理をしても外出するお母さん——

お父さんが亡くなってから、お母さんが一番心を砕いたことは、片親だからとこどもたちに肩身の狭い思いをさせたくないということでした。ですから本当は週末は家において普段手がまわらないでいる掃除や片付けをしたのですが、そこを我慢して土曜、日曜は必ず出掛けるように心がけました。お天気の良い日は遊園地やハイキングに、時にはお友だちの家庭と誘いあって泊りがけの旅行をし、「お父さん」の味を味わせようとしたりしました。雨や雪の日でも映画や展覧会や友だちのピアノの発表会等と、行事には事欠きませんでした。多い時には二つ三つと重なって、時計を見ながら会場を移動することもしばしばでした。

もともとあまり社交的ではない花子さんにとって、こうした週末の過ごし方は大きくなるにつれて負担に思われ出したのですが、お母さんは外出することこそ、こととの心の触れあいと信じて、彼女の気持など解さないようでした。

○罰で懲らしめるお母さん

ずっと以前、まだ3年生位の時、花子さんは一度日曜日の外出を「行きたくない」と行かなかったことがありました。その時は彼女を一人置いていくのは心配だし、先方とは約束があるので迷った揚句、彼女を置いて出かけました。お母さんの気持として、こんなに忙しい思いをして出掛けるのは、そもそもはこどもたちのためを思っていることという思いがあるので、実に腹立しい出来事でした。そこで出掛けるに当ってお釜の中のご飯を残らずおにぎりにして、全部持って出てしまいました。こうすればきつとお腹がすいて二度と行きたくないとは言わないだろうと思ったのですが、実際には花子さんはまず

まず外出したからなくなっていきました。

○いつも怒り、人を許さないお母さん

このお母さんの不幸の始まりは、お父さんが二人のこどもを残して死んでしまった事にありました。ですから早くこどもが大きくなって一人前になってほしいという思いと、離婚していく親たちへの激しい怒りがいつもお母さんの心の中を占めていました。私はお父さんと別れてたくて別れたんじゃない。それなのに自分たちの意志で別れるなんてぜいたくだと言うのです。

早く一人前というのは、このお母さんの場合一人で苦労を背負されていることへの怒りでした。ですから花子さんが学童保育を卒業して4年生になると学校から帰った彼女に、夕食のお米をといでスイッチを入れておくことと、洗濯物の取り込みとお風呂の掃除を言いつけました。自分たちがこどもの頃はこの位の用事は皆やっていたという思いがあるので、お母さんは花子さんに一度に三つの仕事を言いつけたことのたいへんさを考えたこ

とはありませんでした。むしろ言われてやるのではなく4年生にもなったなら、自分から勧んでやって当り前なのに、という気持ちの方が優先していたようです。たまたま帰宅した時にお風呂の掃除がしていなかったり、取り込んだまま散らかっている洗濯物を見ると、ついカッとなって彼女の怠慢をなじるのでした。

彼女が登校しなくなったある日、但任の先生が家庭を訪ねた時、誰もいない家でひとりマンガを見ていた彼女がうれしそうに言った言葉が印象的だったと報告してくれたことがあります。「先生、きょうはとってもうれしいんだ。だつてきょうはお母さんお米をといておこなくていいって言ったんだ。ポーンナスが出るから皆でお寿司を食べに行くんだって」とのこと。この言葉で但任の先生は彼女にとって家事の分担がいかにきついかを察して、早速お母さんと話し合ったのですが、「近ごろの親はこどもに手伝いをさせなすぎるから、私が鬼婆みたいで」と逆に抗議されてしまったそうです。

○友だちの失敗を許せない子に

学校へ行こうとしないばかりか、夜と昼がひっくり返って一日中テレビばかり見ている花子さんを見て、お母さんは自分が忙しかった時、テレビに子守りをしてもらったことはすっかり忘れて腹を立て、テレビを粗大ゴミで捨ててしまいました。前述の兵糧攻めと同じでテレビさえなくなれば夜更かしをしないうらと考えてのことでしたが、これも結果は逆で彼女をますます依怙地にしてしまいました。

こうしたお母さんのやり方は、他人の目に止まる以上に、日常のちょっとした親子のやりとりの中に頻繁にあったと思われます。というのは彼女がまだ登校していた頃の事です。彼女の学級では日直さんの仕事に忘れ物調べがありました。彼女が日直の日、先生の所に「名簿を1枚下さい」と来たので何に使うのかと思いつつ渡したところ、一人一人の欄に忘れ物なしとか○○と記入し、忘れ物をした人に罰としてきょうの帰り掃除をさせたらどうかと言ってきたとのこと。先生もこの徹底した

やり方に感心する前に、人を許さない厳しさにびっくりし、彼女の将来を心配していた矢先に登校拒否が始まったということでした。

相談担当者の目

——母親が働くということと、子どものしあわせとは——

以上二つの事例はいずれもフルタイムの仕事をもつ母親の例です。二人のお母さんは全くタイプが異なるので一緒に論じられる部分は少ないかもしれませんが、長い間子どもたちの心の相談室で仕事をしていて感ずることは、最近の母親たちの子育て観が急速に、かつ大きく変貌しつつあるのではないか、ということです。

つい10年位まではパートタイムの仕事に出る母親の数も今ほどではなく、始めるとしても子育ての第一段階である幼児期は家庭にいて、下の子が小学校に入ったのを機に、という例が多かったように思われます。その頃の私たち相談担当者の悩みの多くは、核家族化、少子化が

進む中での、親の「過保護」「過干渉」対策だったように思います。ところが近年は結婚、出産を経てなおフルタイムで活躍する母親たちが増え、子育ては自分の仕事の「一部分」にすぎなくなりつつあるように思われます。その結果子どもへの関心の薄い親、(放任とも異なる)、ポルトマンによると100%親に依存していると言われる乳児期の親子関係さえも非常に希薄な関係へと移行しつつあるように思われる昨今です。その一例が事例1の桃子さんの母親です。このお母さんは芸術家だけあって非常に感度のよい人で、子どもが求めているものは的確に把握していましたが、自分の生活が忙しすぎて、子どもに手を貸したり、世話をするゆとりがありませんでした。そしてお母さんの揚げている理屈は一々がもつともで、反論の余地のないものでしたが、桃子さんのおねしょをきっかけに、合理的ということだけでは子どもは人間として成長し得えないことをお互いに学びました。結局は子どもが生まれたことによって、自分の生活のペースを乱されるのがこわくて、子ども中心の生活を

否定していた自分に気づいたようでした。そして、「うちの場合は子どもが爪先立ちをしても応じきれないほどの背伸びを要求してきたんですね。」と反省し、「小学校入学前に気づいて本当によかったと思います」と、桃子さんのおねしょの意味を理解したようでした。

花子さんのお母さんの場合は、花子さんの登校拒否の意味を理解するのはむずかしく、今だに自分の生き方が影響していることは及びもつかない状態です。相談担当者としてそれを指摘することも可能ですが、それではこのお母さんが花子さんに行っていることと同じことをくり返すだけのように思われます。この花子さん親子に必要なのは、お互いに自分の運命を受け入れて、失敗をしたりやろうと思っても出来ないことを大らかに受けとめ、許しあう体験ではないかという気がします。それにはまずお母さん自身、片親で奮闘してきたその頑張りを誰かに認められ、人を許しあう喜びを経験することではないかとのことで、今のところはお母さんを支えることが主

体になっていきます。

花子さん自身に対しては、学校へ行かないのではなく、行けない状態にある彼女を誰も非難しないし、罰も与えないことが当面の目標かと思われます。誰からも自分の存在を脅やかされたいんだという安心感を彼女自身を抱くまで、そっと見守っていることが、いつの日か彼女自身で動き出す時へ導いてくれると考えられるからです。

近年女性の高学歴が進み、有能な女性が結婚後も社会へ進出して活躍することは、同性としてこの上ない喜びであります。しかし、その一方で母親たちの繁栄の影に子どもたちの不幸という産物もたらされる危険はないか。心を病んだ子どもたちとの毎日の中で、幸せな思い出に残る子ども時代とは、ということを考えさせられている昨今です。

(東京都立教育研究所)